

域圏とほぼ重なるように、土器から読み取れるまとまりが後期前葉に形成されることが分かった。独特の地域色をもつ土器も、地域集団の共同性を再確認・再生産する装置としての社会的役割を担っていた可能性がある。一方、後期中葉以降に土器の地域性が希薄となる現象は、出自に基づく時間的・系譜的共同性へと社会的関係性の中心が変化したことによって、土器の社会的機能にも変化が生じたことを示す。

以上の分析によって、縄文時代後・晩期の社会においては、地域社会の定着性を基盤として集団関係のあり方が次第に変化する様子を示した。すなわち、集団関係の希薄化や再編として解釈されることの多かった縄文時代後期中葉の社会について、集団関係の性格の変化として捉えるモデルを提示することができた。多様な文化要素が絡み合って成立している縄文社会の中で、要素同士の関係性に注目した総合的な研究によって、個々の要素についての個別研究では到達できない社会変化のプロセスと社会像に接近できた。

学位論文審査結果の要旨

審査会では、学位論文の内容について 1 時間程度の口頭発表の後で、審査委員による質疑応答および講評を行った。総合的には、対象とする範囲のデータを網羅的に収集して分析を行い、とくに山陰地域の縄文時代後期の様相について体系的な分析が行われ、社会変化についてのモデルを提示したことについて高い評価が与えられた。

審議の過程では、各審査委員から、用語や概念の定義に甘さがあること、論証が粗い箇所があることが指摘された。「重層的」という表現や、分析の基礎となる地域・地縁的紐帯といった用語については、より厳密な検討が必要であり、場合によってはより適切な用語への変更が望ましいとする意見が出された。分析結果の解釈にあたっては、別の解釈の可能性等を明示的に検討する手続きがあつたほうがよいという意見も出された。土器の分析に際して、型式学を補足する方法論として本論文で用いられているトラセオロジーという用語についても、それを使用する必要性や意義について議論された。

また、本論文は遺構や遺物のレベルにとどまらず、社会の様相を明らかにすることを目指し、社会考古学の実践を目指しているが、欧米の社会考古学が社会理論の適用を重視するのに対して、本研究はむしろ遺物・遺跡の様相から帰納的に考察するオーソドックスな考古学的手法に依拠していることが指摘された。その点は必ずしも欠点ではないが、本論文が目指す社会分析の内容やその位置づけを明確にするためにも、より詳細な研究史の検討が必要であることが指摘された。

一方で、山陰地方の縄文時代のデータについて現時点で最も網羅的なデータベースを作成したことは重要な基礎作業として評価された。また、そのデータを用いて遺跡レベル、遺構レベルという異なる視点から体系的に分析し、人口動態と地域社会形成の関係について検討し、遊動社会から定住社会への移行のプロセスについて、ひとつのモデルを提示した点は、縄文時代に関する研究を前進させるものとして評価できる。また、縄文時代後期の土器文様の変化についても体系的にまとめられており、オリジナリティのある重要な成果として位置付けることができる。

以上のように、いくつかの未熟な部分は含みつつも、近年資料が増加しつつある山陰地域の縄文社会について、綿密に収集したデータに基づいた研究から明らかにしようとした本研究の学術的意義は大きく、学位論文として十分な内容であるという点については審査委員全員の意見が一致し、合格と判定した。